大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

Katherine Mansfield “The Garden Party”の浮遊性再考：開かれた庭をめぐる対立構造について

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 新井, 英永
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002654

Katherine Mansfield “The Garden Party”の浮遊性再考
──開かれた庭をめぐる対立構造について──

新 井 英 永

言語文化学研究（英米言語文化編）
2011・3　第 6 号抜刷
大阪府立大学人間社会学部　言語文化学科

Katherine Mansfield “The Garden Party”の浮遊性再考
── 開かれた庭をめぐる対立構造について ──

新 井 英 永

I

Katherine Mansfield（1888-1923）の代表作の一つである “The Garden Party”（1922）には、様々な問題が内包されており、それがいまだにこの作品が読み継がれ、論じ続けられてきている主な理由であろう。たとえば、つい最近出版された研究書は、Mansfield と出版市場の関係に着目し、彼女の “elite” 志向から “mass” 志向への移り変わりを示す作品としてこの短編小説を論じている (McDonnell 157-163)。この “elite” か “mass” かという議論は、テクストでテーマ化されている階級の対立を踏まえており、旧来からの問題を新たに展開した研究とも言えるだろう。もちろん、“mass” への志向と労働者階級への志向とを同一視することができない以上、この新たな視座は、もともとの階級の問題系に市場の問題系を付け加えたとはいえ、前者の問題の根本的解決と捉えることには無理がある。そもそも、生と死の問題も含め、階級の問題の安易な解決を拒んでいるのがこの短編小説の特徴であるとも言え、その意味では、Mansfield が市場を強く意識し大衆に広く読まれることを望んでいたという外在的事実により、テクストに内在する諸対立を解決することはできない。逆に、テクストの内在的諸分裂を見据えようとするならば、“elite” か “mass” かの二項対立も脱構築されるべきものとなるのではないだろうか。

したがって、市場という新しい観点を捨象する必要はないが、諸分裂を内包するテクストの構造こそが再検討されるべきである。と

いうのも、たとえば、1950 年代に Warren S. Walker が提起した問いは、それに対してすぐに Donald S. Taylor と Daniel A. Weiss による反駁があったとはいえ、完全な解答が見いだされ決着したとは言い難いように思われるからである。本論の目的は、社会的対立や生死の問題が宙づりにされ開かれていることを明らかにし、Mansfield のこの代表的短編の特徴を「浮遊性」の観点から改めて捉えることにある。

II

より具体的に、上で言及した Walker、Taylor、Weiss それぞれの論点を振り返り、問題点を指摘したい。まず、Walker は、“The Garden Party” の二つの対立、すなわち、“youthful fear of death vs. some kind of acceptance of death” という対立と “Laura’s social attitude vs. her mother’s”（357）という二つの対立のうち、前者の問題には解決がもたらされているのに対し後者は未解決のままであり、その結果読者にはある種の不満が残ると主張した。Walker によれば、この作品は主人公である少女 Laura の成長を扱っており、エンディングにおいて彼女は、オープニング時に比べて確実に成長を遂げる。その契機は、隣人、といっても下層階級に属するため Sheridan 家とは心理的には距離がある Scott の事故死である。その死に接し最初は衝撃を受けた Laura だが、現実の死は予期したようなものではなく、ある意味ではそこに美が存在することを発見する。このように Laura により獲得された生と死に関する新たな視座が彼女の成熟の証である。反面、Scott の死に際しガーデン・パーティーの中止を訴える Laura と、その要求を却下しパーティーの予定通りの開催を説く彼女の母親 Mrs Sheridan との社会的態度の対立は解消されない。母親によって Laura に与えられた帽子は、彼女の注意を隣人の悲劇からパーティーに向け直させることにいったんは成功するが、Laura が Scott 家にパーティーの残り物を届けた際に富裕階級の象徴であるこの帽

子をかぶっていたことを悔い、そのことで死者に対して “Forgive my hat” と許しを請うことにより、完全な懐柔には至らなかったことが明らかになる。Laura を路地へ使いに送り出すというのは母親の発案なので、彼女は自らの懐柔策を自らの偽善的提案により失効させ、墓穴を掘ったと言える。Laura の社会的態度に加え、事態を曖昧にしているのがエンディングにおける彼女の兄 Laurie の介入である。Laurie は、Scott の事故死を知った時の Laura の動揺も、Scott の死体に直面した時の彼女の心の動きも、とても理解したようには思えないからである。

以上が、Walker の議論の梗概であるが、その最大の問題点は、社会的問題とは異なり生死の問題には解決が与えられているとするその主張に説得力がないことである。彼の議論においては、生／死の対立は Laura の “youthful fear of death vs. some kind of acceptance of death”（357）と限定ないし凝縮されている。Walker がその対立の解決を確信できる証拠として “The Garden Party” から引用した箇所を、彼よりも長めに以下に引用してみよう。

> There lay a young man, fast asleep—sleeping so soundly, so deeply, that he was far, far away from them both. Oh, so remote, so peaceful. He was dreaming. Never wake him up again. His head was sunk in the pillow, his eyes were closed; they were blind under the closed eyelids. He was given up to his dream. What did garden parties and baskets and lace frocks matter to him? He was far from all those things. He was wonderful, beautiful. While they were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane. Happy . . . happy. . . . All is well, said that sleeping face. This is just as it should be. I am content. (349)

たしかに、この場面での Laura は死の恐怖といったものに捕らわれていない。よって “some kind of acceptance of death” は成立している

と言えるだろう。しかしながら、Walker がその対立項として挙げる Laura の “youthful fear of death” の方はどうか。それについての記述ないし描写は、上の引用のみならず、他の箇所を探しても見つけることが難しいように思われる。訃報に接した時に Laura が恐怖を感じた気配はない。路地に弔問に向かう時でさえも死に対して恐れを抱いているようにはとても思えない。彼女の心を占めるのは楽しかったガーデン・パーティーのことだけであり、Scott の死については、実感を持てないでいるからである。

> Here she was going down the hill to somewhere where a man lay dead, and she couldn’t realize it. Why couldn’t she? She stopped a minute. And it seemed to her that kisses, voices, tinkling spoons, laughter, the smell of crushed grass were somehow inside her. She had no room for anything else. How strange! She looked up at the pale sky, and all she thought was, ‘Yes, it was the most successful party.’ (347)

なるほど、路地に入ってから Laura は、来たことを後悔し始め “terribly nervous”（348）な状態になる。しかしその原因は、死への恐れというよりも、あくまで自分が場違いなところに来てしまったという感覚であり、その感覚に起因する周りの視線に対する過剰なまでの自己防衛の意識である。“To be away from those staring eyes, or to be covered up in anything, one of those women’s shawls even. I’ll just leave the basket and go, she decided. I shan’t even wait for it to be emptied.”（348）要するに、“youthful fear of death vs. some kind of acceptance of death” という対立は、いわば捏造されたものなのではないだろうか。その原因を詳しく探ることは本論の趣旨から外れるが、さしあたり次のことは言えそうだ。この作品を主人公である少女 Laura の成長を扱っていると考える Walker は、Laura の成熟の根拠を示す必要があり、そのために実際には存在しなかった恐怖心

とその克服という物語を必要とした可能性がある、ということである。Laura が死に関する新たな視座を得たことまで否定するつもりはない。が、Walker の読解を考えるにつけ、主人公は成長するものであるという教養小説に基づいた解釈規範の呪縛の強さを思わずにはいられない。

生／死の対立を Walker のように “youthful fear of death vs. some kind of acceptance of death” と限定して解決しようとした思惑の背景には、生死という大きな問題にしてしまえばとてもその解決がなされているとは言えなくなってしまうという至極当然の認識があったかもしれない。結末における Laura と Laurie の以下の会話からも、生の問題、したがってそれと表裏一体の死の問題は、解決からほど遠いことが明白である。

> But all the same you had to cry, and she couldn’t go out of the room without saying something to him. Laura gave a loud childish sob.
>
> ‘Forgive my hat,’ she said.
>
> And this time she didn’t wait for Em’s sister. She found her way out of the door, down the path, past all those dark people. At the corner of the lane she met Laurie.
>
> He stepped out of the shadow. ‘Is that you, Laura?’
>
> ‘Yes.’
>
> ‘Mother was getting anxious. Was it all right?’
>
> ‘Yes, quite. Oh, Laurie!’ She took his arm, she pressed up against him.
>
> ‘I say, you’re not crying, are you?’ asked her brother.
>
> Laura shook her head. She was.
>
> Laurie put his arm round her shoulder. ‘Don’t cry,’ he said in his warm, loving voice. ‘Was it awful?’
>
> ‘No,’ sobbed Laura. ‘It was simply marvellous. But, Laurie—’

> She stopped, she looked at her brother. ‘Isn’t life,’ she stammered, ‘isn’t life—’ But what life was she couldn’t explain. No matter. He quite understood.
>
> ‘*Isn’t* it, darling?’ said Laurie. (349)

このエンディングの場面における Laurie の介入は、社会的問題、具体的には Laura の社会的態度の曖昧さ、を増幅させるものとして Walker により取り上げられていた。Walker は、“Was it awful?” と聞く Laurie に “It was simply marvellous” という Laura の返答の真意が伝わったかどうか極めて疑わしいとして、次のように自らの論考を締めくくっている。

> One wonders whether he even understands the significance of the death to her; one is morally certain that he never suspects the inner turmoil she has undergone in defending to herself, as well as to the family, her benevolent sensibility. (358)

そもそも小説がその結末で提示しているのは、Walker が措定しようとしたような限定的ないし具体的対立ではなく、より大きな生／死の対立である。だからこそ、後述するように Taylor と Weiss の社会的問題は二次的対立にすぎないという主張が一定の説得力を持ちうる。Laurie の理解力を疑問視する Walker は、あたかも Laura の成長の証人であるべき人がその役割を果たしてくれず苛立っているかのようである。

III

上で検討した Walker の論考に対して Donald S. Taylor と Daniel A. Weiss が “Crashing the Garden Party” という論文において反駁を試みた。[1] 両者のアプローチは異なるが、Taylor と Weiss ともに、

Laura と母親の社会的対立は生／死というより大きな対立の下位に属するという観点に立ち、後者の対立が解決されることにより前者の対立も解消されることを示唆している。Taylor はこの短編小説を、Laura がガーデン・パーティーに象徴される “the dream world”（Taylor 361）を脱却し、その中心に死という真実を宿す “the real world” の実在に覚醒する物語であると捉える。Taylor によれば、“Forgive my hat” という Laura の懇願は、彼女が “the meaningless dream of the garden party”（362）を最終的に拒絶したことを意味する。その結果として、偽りの夢の世界は、本当の夢である死 (“Death is the real dream”)、つまり Scott の死体が夢を見ているように横たわっているという現実の世界、を前に雲散霧消することになる。たしかに、Laura が物語の結末で “life” を口にしているように、物語が二重構造、すなわち、生／死の対立が階級的対立を下位対立として包み込むようになっているとは言えるかもしれない。しかし、本当に解決がなされたかについてはどうであろうか。Walker も生死の問題の方が社会的対立より重要であると述べるように、作品の二重対立構造に関しては、Taylor とのあいだにそれほど大きな差はないとも考えられる。はっきりした違いは、Laura の帽子、あるいは “Forgive my hat” という言葉の解釈である。Walker がそこに曖昧性を見出したのに対し、Taylor は Laura の夢の世界から現実の世界への決定的移行と捉えている。要するに、Taylor が提示するのは、主人公 Laura が労働者階級という現実とその社会を包み込む死という現実に覚醒する成長物語である。

Weiss は、ギリシャ・ローマ神話の枠組みでこの作品を読み解くことができると主張する。その場合、Laura は Proserpina と同等視され、彼女の路地訪問は、Proserpina の冥界行きに比される。路地（＝冥界）で Laura（＝Proserpina）が経験することになるのは、“Life and death are coextensive dreams”（Weiss 364）という神秘・真実であり、そこでは彼女と死者は対等であり階級の垣根、つまり社会的対立の問題は存在しない。これが Weiss の議論の骨子である。たしか

に、Weiss が提示する Proserpina の物語と Laura の物語のあいだには共通性がある。そうであるがゆえに、疑問に思えるのは、Weiss が Laura の “initiation” というテーマに固執するあまり、神話の結末、つまり Proserpina は母のもとに帰還できたものの冥界の食べ物を食べたために一年の一定の期間を冥界で残りの期間を母とともに地上で暮らすことになるという結末、が無視されていることである。この結末に忠実であれば、Laura は生の世界と死の世界を行き来する、すなわち上層・下層二つの階級のどちらにも属さず両者を行き来する、ということになるはずである。しかし、こう解釈すると社会的二項対立と生／死の二項対立の問題ともに未解決のままである。この非決定性を回避したいがために、Weiss は “The Garden Party” を Laura が生と死の隣接性を発見するというイニシエーションの物語として読み解き、この作品の中にある対立を封印したのではないだろうか。これではせっかく自ら導入した神話的読解の可能性を、自ら忍び込ませた主人公の成長物語の神話で閉ざしたと言わざるをえない。Laura の帽子に関する Weiss の解釈にも首をひねらざるをえない。というのも、彼は彼女の “Forgive my hat” という言葉を “Forgive me for being alive” あるいは “I love you, but I am committed to life now” (364) と解釈しているからである。つまり、魔除けの機能も持つとされる Laura の帽子は、彼女を死の世界（路地）ではなく生の世界（パーティーの庭）に引き戻す役割を持つものとして肯定的に捉えられているのである。この解釈は上述の Taylor の解釈（Laura の路地という現実の世界への決定的移行）とは逆である。なぜなら Weiss が Laura の富裕階級への帰還を示唆しているのに対し、Taylor は彼女の労働者階級への接近を示唆していたからである。たしかに、Laura と母親の社会的対立はより大きな生／死の対立に従属するという観点に立つかぎりでは、また “The Garden Party” を主人公の成長物語として読むかぎりでは、Taylor と Weiss 両者の立場は同じと言いうるかもしれない。しかし、両者の異なるアプローチの検討が明るみに出すのは、この作品の解釈をめぐる二人の社

会的立場の対立である。

ところで、Weiss はその論考を以下のように締めくくっていた。

> “The Garden Party”’s appointed task is to leave Laura at this pristine moment, on the other side of her childhood. To ask whether she will become ultimately like her mother or “reorient her feelings toward her family,” is like asking what finally happened to Snow-White or Catskin. It is asking for another story. (364)

つまり、“The Garden Party” はあくまで一つの完結した物語として読まれるべきであり、社会的態度の問題の解決をこの作品に求めることは、別の物語を要求するに等しい、いわば無いものねだりである、と主張されている。ということは、見方を変えれば、Weiss 自ら Laura の社会的態度の決定不能性を認めていることになる。言うまでもなく、社会的態度の決定不能性は、生死の問題の決定不能性と連動するだろう。

IV

かくして論点は、Laura の社会的態度が他の対立により包含され作品自体の完結性は損なわれていないという立場と、Laura の家庭内外における立ち位置の曖昧性が物語自体の非完結性と関わっているという立場のどちらに説得力があるかという問題に移る。後者の立場から、正木建治は、物語の非完結性の特質を「浮遊性」と捉える論を展開した。この「浮遊性」は様々な二項対立が止揚されることなく宙づりにされていることから来ていると思われるが、以下、まずは正木の論点を確認しておこう。

正木は、ある初夏の一日に Sheridan 家で開催されるガーデン・パーティーが閉じるところで物語も完結すると予想されるにもかかわらず、“The Garden Party” というテクストはガーデン・パーティー以

後の物語をもってしまったことで「浮遊感を漂わせてしまった」と述べる (409)。つまり、浮遊感の一つの原因を、物語の舞台が庭の中に限定されずに外の世界、具体的には労働者階級の路地へと拡散したことに求めている。また、作品全体に漂う浮遊感は、パーティーに参加する人々を旅の途中に Sheridan 家の庭に舞い降りる色鮮やかな鳥に喩える語りによく表れている、と指摘される。つまり、庭内のパーティー自体は実体感覚の伴うものであるのに対し外界への展開のみが浮遊性を生み出すというわけではなく、ガーデン・パーティー自体も一時的で実体感覚の極めて希薄な行事として描かれているということである。別言すれば、この浮遊性は空間的にも時間的にも作品全体を覆っている。招待された客が鳥のように自由に出入りし、なおかつ招待した家族の成員が招待されざる人々の居住空間まで出向いていくという意味で空間的浮遊性が生じる。同時に、行事のはかなさが明示され、パーティー終了後も物語が終焉せずオープン・エンディングになっているという意味で時間的浮遊性が生じているわけである。

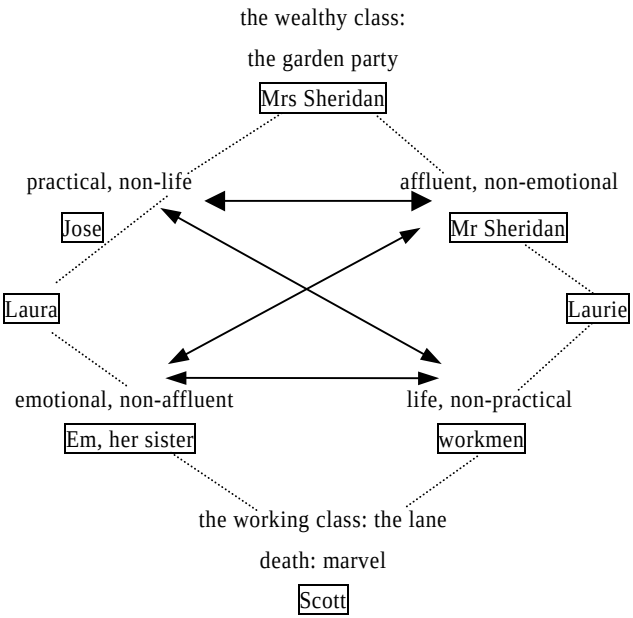
正木によれば、この浮遊感、実体感覚の曖昧性が登場人物の描写にも投影されている。中でも、「存在の希薄性、曖昧性」が「もっとも微妙な表れ方」をしている Laurie に焦点が当てられ、この Laura の兄の浮遊感とエンディングの非完結性の連関について、次のように主張されている。

> 「人生って── “isn’t life──” 」という、ローラの述部欠如の発話にたいして、「全くそうなんだよね *“Isn’t* it, darling?”」というローリーの応答は、ローラの空白の述部を埋めたものでは決してない。センテンスを閉じるのが、疑問符か、感嘆符か、それとも終止符なのか、結末が宙づりの状態にただ疑問符を付与したにすぎない。つまりローリーは相手の未完の発話をただ反復しただけなのだ。疑問とすべき内容が欠如しているときの疑問文となれば、いっそうローリーの存在に浮遊感が漂う。（416）

正木は、「この闇に閉ざされた浮遊する世界」でこそ、「兄妹の一体化」が成立し、「ローラの至福の瞬間」が訪れたことを述べている。が、同時に、その時空間が盤石なものではないことも指摘されている。

V

Laurie と Laura が、“The Garden Party” というテクストの浮遊性、換言すれば、テクスト内の諸対立の未解決性と緊密に関わっていることは明らかであろう。これらの対立を、フレドリック・ジェイムソンにより文学批評に導入された A・J・グレマスの図式を使って整理すると以下のようになる。[2]



短編小説全体に占める描写の割合が少ないとはいえ（Zapf 46; 正木 409)、タイトルにもなっているように、この物語がガーデン・パーティーをめぐって展開されていることは間違いない。その時空間は富裕階級にのみ許される一種の人工楽園的なものであり[3]、冒頭の Mrs Sheridan による “I’m determined to leave everything to you children this year” (336) という宣言はあるものの、実質的にパーティーを統括しているのは彼女である。ゆえに上図の頂点には Mrs Sheridan が君臨する。もちろん、パーティーの準備・運営には、仕切るのが好きで私情に捕らわれることのない “practical Jose” のような子供の存在が必要であり、かつ、一家の大黒柱である Mr Sheridan の財力がなければ、パーティーは存立しえない。そこで、Mrs Sheridan を頂点とする小三角形の底辺を娘と夫の両者が形成する。

“practical” の単純否定である “non-practical” の項は、workmen、具体的にはテントを張りに来た男たちにより占められる。彼らはてきぱきと仕事をするが、ラヴェンダーの匂いをかぐという感受性豊かな者がいたり、“Matey” と親しみを込めて呼びかける者がいたりするため、Jose とは異なり情に厚い。効率性のみを求めてはいないように見えるその仕事ぶりからは、強い生命力（life）が感じられ、“This Life is Weary” という歌を上辺だけ飾るようにしてパーティー用に練習する Jose (non-life) とは対照的である。

上層階級に属する Mr Sheridan が “affluent” で下層階級に属する Em や her sister が “non-affluent” なのは当然であるが、前者が一家の生計を支える働き手であるのに対し、後者がまさにそうした働き手を失いあとに残された者であることを考えると対照が際立つだろう。Em の夫 Scott の死について、パーティー後に悪気はないものの大した感情も込めず話題にする Mr Sheridan (non-emotional) と、腫れた眼や唇をして悲しみに沈む Em (emotional) の姿もまた対照的である。

Mrs Sheridan は Jose や Mr Sheridan に支えられつつガーデン・パ

ーティーを催した。一方、Scott は Sheridan 家の庭でテントを張った workmen のように生き生きと働いていたであろうが、今は Em のもとを去り路地で永遠の眠りについている。図における上部の三角形が “the garden party” を頂点とする結合を表しているのに対し、下部の逆三角形は頂辺の二点から底点の “death” に向けての離脱を表している。もっとも、Laura がこの死を “marvel” として、より詳しくは “While they were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane” と捉えていることは、まさに “death” が “the garden party” の必ずしも否定的ではない構造的対蹠物であることを示している。

この図式の上部三角形（the wealthy class）と下部逆三角形 (the working class) を媒介するのが Laura と Laurie である。ジェンダーの観点から分節化可能な左部三角形の頂点を Laura が右部三角形の頂点を Laurie がそれぞれ占めることになる。Laura と Laurie は、もちろん、それぞれ Sheridan 家の一員であり富裕階級に属している。しかし、幼いころは立ち入りを禁じられていた路地を成長してから二人で歩き回った過去があり、再び今この路地での時間を共有しているように、この兄妹は家族の他の成員とは異なり路地との経験的・心理的接点を持っている。事実、Scott の事故死に際しガーデン・パーティーの中止を訴える Laura は、彼女にあきれる “practical” な姉 Jose とは違い、夫の死に泣き崩れる “emotional” な Em や her sister に共感できる感受性を持っていると考えられる。Scott の死に顔とも対面し、そこである種のエピファニー体験さえする。

Laurie は、Mr Sheridan との出勤の様子から父親の忠実な後継者との印象が強く、テントを張りに来た workmen や亡くなった Scott と直接的なつながりを持っているわけではない。しかしながら、正木が指摘するように、Laura を通して Laurie は、労働者階級の男たちと興味深く結びつけられている。テント設営の労働者に尋常ならざる好感を持った Laura が電話で家に呼び戻され玄関にいた兄を抱きしめる場面は、「労働者への異性的共感は、明らかに兄ローリー

への近親的愛を思わせる行為に置き換えられている」ことを物語っている（正木 411）。さらに、Scott 家への弔問を終え家路につく Laura が迎えに来た Laurie の腕をとりぴったり体を寄せる場面は、玄関での兄妹の抱擁の場面と重なり、「『一人の若者』に変容したスコット氏への賛美から兄への近親愛的な親密さへ移行する心的過程もまた、そのときの場面の反復」である（正木 415）。つまり、Laurie は労働者たちのいわば分身であり彼らの “life” と “death” をともに具現する存在なのである。とはいえ、路地からそそくさと帰ろうとする Laura と心配する母親のために様子を見に来た Laurie が路地の世界に属しえないことも明らかである。彼らは坂の上の家に帰るだろう。しかし、その後も階級と階級のあいだを、そして生と死のあいだを浮遊し続けるだろう。[4]

註

1 この論文は二部構成になっており、前半が Donald S. Taylor による “I. A Dream—A Wakening”、後半が Daniel A. Weiss による “II. The Garden Party of Proserpina” である。

2 ジェイムソンによるこの図式の説明として、『言語の牢獄』169-74、『政治的無意識』324-27、ならびに、Jameson *Fables of Aggression* 99 を参照。

3 “The Garden Party” が論じられているわけではないが、「楽園」や「庭」のイメージを手掛かりに晩年の Mansfield の内面の世界を探る論考として、遠藤不比人「象徴的治療を求めて」がある。

4 浮遊するシニフィアンとしての “karakas” 「カラーカの木立」(Mansfield 337, 338) については、稿を改めて論じたい。

引用文献

Jameson, Fredric. *Fables of Aggression: Wyndham Lewis, the Modernist as Fascist*. Berkeley: U of California P, 1979.

Mansfield, Katherine. “The Garden Party.” *Selected Stories*. Ed. Angela Smith. Oxford: Oxford UP, 2002.

McDonnell, Jenny. *Katherine Mansfield and the Modernist Marketplace: At the Mercy of the Public*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010.

Taylor, Donald S., and Daniel A. Weiss. “Crashing the Garden Party.” *Modern Fiction Studies* 4.4 (1958-59): 361-64.

Walker, Warren S. “The Unresolved Conflict in ‘The Garden Party.’” *Modern Fiction Studies* 3.4 (1957-58): 354-58.

Zapf, Hubert, “Time and Space in Katherine Mansfield’s *The Garden Party*.” *Orbis Litterarum* 40.1 (1985): 44-54.

遠藤不比人「象徴的治療を求めて ── キャサリン・マンスフィールドの四つの庭」『藝文研究』第 57 号 (1990): 46-63.

ジェイムソン，フレドリック『言語の牢獄 ── 構造主義とロシア・フォルマリズム』川口喬一訳，法政大学出版局，1988. [Jameson, Fredric. *The Prison-House of Language: A Critical Account of Structuralism and Russian Formalism*. 1972. Princeton: Princeton UP, 1974.]

──. 『政治的無意識 ── 社会的象徴行為としての物語』大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳，平凡社, 1989.

[*The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell UP, 1981.]

正木建治「キャサリン･マンスフィールドの浮遊性 ──“The Garden-Party” 考」『英語・英米文学のエートスとパトス ── 杉本龍太郎教授古稀記念論文集』杉本龍太郎教授古稀記念論文集刊行委員会編 (大阪教育図書, 2000): 409-17.